

巻頭言
Greeting

× **末松 隆太郎**
Ryutaro Suematsu
聖書宣教会理事長
(栄聖書教会主任牧師)

Profile

1949年生まれ。1979年聖書神学舎卒、卒業後、米国フラー神学校にて宣教学修士取得。1983年より日本福音キリスト教会連合栄聖書教会(主任)牧師。2020年より聖書神学舎「宣教学I」担当講師。



「天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません。」
(マルコ 13 章 31 節)

諸教会の祈りによって支えられ、創立以来 60 年を超えて、ここまでの歩みを主が導いてくださっている事を覚えます。時代は移り、教師陣も学生にも変化がありますが、宣教会が教会に仕える器を送り出し続けている事実に、主の恵みと期待のまなざしを感じます。聖書宣教会に流れる「いのちの水」は変わることなく流れています。その重要な柱は、表題の聖句のように、移り行く世界に対峙する神のことば(聖書)への全幅の信頼です。

私が学生であったのは、もう 45 年も前になります。それまで教条的に聖書の権威を受け入れていた私には、学びが始まるや、様々な疑問が沸々と湧き上がりました。聖書の権威を本当の意味で理解するためであったと思います。色々な質問をする者に、丁寧に答えてくださる先生に、こう聞きました。「厄介払いせず、何で(喜んで)、これほど誠実に教えてくださるのですか。」答えはこうでした。「理性に限界があることは認めて、同時に本当に理解できるまで、疑問を封印してはならない。それらの多くには、正しく答えがある。あなたの背後には、これから遣わされる教会の人々がいる。あなたが講壇から語ることばは彼らの生き死にかかわる。その中心は聖書に全幅の信頼をおいてみことばを語る器だ。将来のあなたの姿を見て、今のあなたを教えている。」私は、聖書神学舎での学びを通して「聖書信仰」が根付き、私の 40 年を越える牧会の土台となった事を感謝しています。

さて、現在の日本のキリスト教会の閉塞状況が伝えられます。しかし、現状を見て悲観論に傾いてはなりません。神は創世記の初めから、どんなに時代が悪くても、神を心の底から信じ歩む者の群れを守り、時代が移っても連綿と流れる地下水脈のように彼らを用いられます。聖書を見ると、殆どの時代は閉塞状況にありました。孤立感と徒労感に浸されるエリヤに、その働きは「バアルに膝を屈めない 7000 人」と共の戦いである事を示されます。いのちを失い「砂漠化」が進むこの世にあって、主の民が礼拝する場は、いのちの水の湧き出るオアシスです。そのオアシスはみことばが、本来の意味をもって語られ、それに応答する者が存在することによって、現実のものとなります。そこに真の渇きが癒される、神のかたちの回復の場が存します。聖書宣教会がこの時代において、その使命を果たしていく献身者を送り出し続ける事が出来るように願っています。

さて、聖書宣教会の理事会で人事の交代がありました。鳥居完次理事長、鈴木義明理事、津村俊夫理事の 3 人が任期を終え、退任されました。尊いお働きに感謝します。代わって三浦譲師、小林久実師、伊藤暢人師が理事に加えられました。その中で私が理事長に選任され、3 年の任期を務めさせていただく事となりました。重責ではありますが、継続して理事の任に当たられる佐藤源兄、竹内豪師、赤坂泉師と共に、理事会の働きを担わせていただきます。

No.187 Topics

- p03 研修生の証し
- p04-05 卒業生の働きの間から
- p07 48 年を振り返って

赤坂 泉

Izumi Akasaka
聖書宣教会 校長

「主を恐れることは知識の初め。」

(箴言 1:7)

主の手に支えられて

コロナ対応も二年になりましたが、主の変わらない確かな御手に支えられ、皆様の禱援に励まされて、学舎の働きを続けることができました。感謝しています。クラスの学びはオンラインでも相当の充実が可能ですが、全人格的な教育の実現のためには、対面の要素も不可欠であると考えます。ですから、寮生活や教会奉仕が、変則を求められながらも、かなりの程度まで維持されたことも感謝しています。

コロナ対応下で三度目となる卒業式では、7名が諸教会に遣わされて参ることを願っています。大勢の皆様を学舎にお迎えはできませんが、リモートでご視聴いただき、お祈りいただけたら幸いです。

学舎の経済も主が守ってくださいます。

諸教会、皆様の上にも主の御手の豊かな顧みがありますようにお祈りします。

直面する変化の中で

変化も続きます。津村俊夫先生が、今年度をもって通常のクラスの担当から退任されます。48年にも及ぶ聖書神学舎での働きには感謝のほかありません。今後とも、聖書学研究所所長としてこの学舎にあって主にも貢献して下さることを感謝します。

理事会の構成も巻頭言の通りに更新されました。学舎の経済は主と主の教会に全面的に依存しています。末松先生を筆頭に、理事会が宗教学法人の財政の重荷を担当して下さることを感謝しています。

人事の必要のために、なお続けてお祈りくださ

い。専任教師の必要と教師陣の拡充、次世代の職員など、主が折に適う導きを明らかにしてくださいますように。

新年度に備えて

新年度は本科に4名、聖書科に1名の新入会生を迎えることとなります。送り出し、支える諸教会に主の祝福がありますように。

夏期研修講座と教会音楽夏期講習会は対面で開催する準備を進めています。概要は8頁にありますが、詳細はウェブサイトをご覧ください。

9月から提供する計画の拡大教育、その後のオンラインで提供する継続教育なども、今後、主としてウェブサイトでの情報提供になります。是非積極的にご確認ください。

ただ主を恐れて

それにしても「主を恐れること」において揺るぐことなく一貫することを切望します。コロナ対応とひと言で述べても、感染予防や感染拡大防止の具体策は多種多様であり、多くの考えが交錯します。入会試験や卒業判定会議のように、主の召しに関わること、個人の人生を左右するような判断にも少しの意見の幅があります。学舎の働きの一層の充実を願う一同のなかに、その具体的な道筋については様々な着想や優先順位があります。多様性のもたらす豊かさを喜び、「主を恐れること」がいつも、どの部分も、全面的に支配していることを大切にしたいのです。

学舎においても、同窓諸師また諸教会においても、ただ主を恐れて主に仕える者たちの周りに主の使いが陣を張り、恵みを豊かに溢れさせてくださいますように。



02 研修生の証し A Student's Testimony



全ての中心に礼拝を

吉村 直人

聖書神学舎本科4年

いつの日だったか、ある先輩に「宣教会では、全て自分次第だよ」と言われたことを思い起こします。4年間を過ごしてみて、果たしてその通り、「聖書宣教会に学びに行けばこのような牧師になる」というテンプレートはなく、いかに主からの召しに忠実であるかが問われる日々だったように思います。何が大切であるかは、主との関係の中で各々受け止めていくのです。

私にとって「自分次第」を問われたのは“礼拝”においてでした。宣教会では毎日30分間のチャペルの時間があります。賛美し、祈り、みことばを聞く。非常にシンプルな時間が、ある意味では淡々と過ぎていきます。ボーッと過ごそうと、睡魔と戦ってしようと、少し斜めからこの礼拝を見つめてしようと…。あるいは、心を注いで主の前にひれ伏してようと。どのような姿勢であろうと、同じ30分間です。

ある時、一人の人を通してこのチャペルの時間をどのように過ごしているのだろうか、と私は問われました。何でも無い、普通の日のチャペルです。彼は一番前の席に座り、主の前に姿勢を正して座っていました。そして大きな声で賛美を捧げ、静かにみことばに聴いていました。普通の日に、あたり前のように主を礼拝する

姿。特別なことではないかもしれませんが、そこに信仰者にとって最も大切な姿勢が表れているように私には思えました。つまり一ただ、ひたすらに神を礼拝すること。これこそが、信仰者にとって何にも増して大切なことではないか。神学校でたくさんのことを「得る」こと以上に、全てを手放し「捧げる」ことが私には求められているのではないか。彼の姿を通して、改めてそのことを問われたように思います。その日以来、私は研修生活の中心をチャペルの時に置こう、と決めました。献身者であるとは、まず一人の信仰者、主を礼拝する者であると教えられたのです。

神学校において、勉強によって学べることは様々あるでしょう。単位さえ取れば“卒業”することはできるかもしれません。しかし信仰、主を礼拝することは授業や知識のみによっては学ぶことはできません。毎日の礼拝への姿勢が、信仰者を形作っていくのだと思います。生活の只中で心、時、空間を聖別してお捧げすること。神を礼拝して生きることを私は宣教会での4年間で、主から教えていただきました。この先どこに遣わされようと、ただ主を礼拝する者として歩ませていただきたいと願っています。感謝して。



語ることによって

川口 昌英

Shouei Kawaguchi

金沢中央教会 牧師

二年前に、前任地の十年を含めて、つごう四十年になることから、主任牧師の務めから退いた。退任を記念して、これまで語ってきたものをまとめて小さな説教集を発行した。その序において次のように書いた。

「自分でも固苦しいと思う説教を発行しようとするきっかけとなったことばがあった。牧師になった1980年、それから四十年経った最近も、別の人々から偶然にも、私たちは説教では感動を求めているのではない、神のことばを聞きたい、御心の啓示である聖書はどのように言っているのかを知りたいと言われた。

それを聞いて、私は、自分の説教に欠けていると思っている、みことばを感動的に人の魂深くに届けることができなくても、みことばその通りに語る固苦しい説教でも、私なりに受けとめている、聖書が何を伝えているかを知っていただくために発行しても、ゆるされるのではないかと思ったのだった。

説教するときいつも心がけていることがある。第一は、聖書的事実であること。これは言うまでもない。啓示である、神のことばである聖書に従っていることである。第二は、本質的事実であること、これは聖書の本質、また人や社会の本質を突いていることである。そして第三は、現実的事実であること、遠い昔の、遠く離れた人々の話ではなく、現代の私たちに向けられた、生ける神のこ

とばとして受けとめ、伝えることである。これらを心がけながら、みことばの説教にあたってきた。」

卒業してから四十二年経った。その間、社会は大きく変わった。大規模な幾多の自然災害があった。また、主観だが、人々の意識も、この国に生きる私たちの特徴の一つと言われている集団主義的な傾向がますます強くなっているように思う。国際社会においても、ベルリンの壁が取り除かれ、世界は融和に向かって進むと思われたが、新たな理由による対立が世界各地において以前にも増して出現している。そして、言うまでもなく、実際に牧師として務めてきた二教会には困難な問題が多くあった。

しかし、そんな中でも説教の奉仕が与えられていたことは、これまでの支えとなった。みことばを語ることによって、いつも原点に立ち帰るように導かれた。どんなに厳しい現実でも、現実からみことばを見るのではなく、みことばから現実を見るように修正された。そうすることによって、四方八方が塞がれているように思えた時にも天の窓がたえず開かれているを感じ、新しい一歩を踏み出すことができた。説教は、私にとって難しい務めであるが、新しい力を与える、私を支える務めであった。

元共産圏にあったこの国に宣教師として遣わされて14年が過ぎました。一見自由に宣教ができるように思われる国ですが、それでも宣教師としてビザを取得するのは年々難しくなっています。その中で宣教には知恵が必要ですが、私は低所得者層が住む集落の一つにある地域教会と協力して子ども向けの学習支援センターを行なっています。宿題の手伝いをするのが主な活動ですが、日本風に言えば「子どもの見守り」の場という役割があり、子どものちょっとした変化や会話から地域のソーシャルワーカーに相談を持ちかけることもあります。保護者がアルコール依存というのはよくあるケースであるのに始まり、親の離婚・再婚の繰り返し、育児放棄、身体的精神的虐待、ヤングケアラーなど、それぞれの子どもや家庭にストーリーがあり、とてもここには書ききれません。一緒に働いてくださっている現地教会の姉妹たち自身も地元出身者です。地域の事情に詳しいことや、彼女たち自身も苦勞をしてきた人たちなので、子どもたちへの対応も的確です。

最近の祈りの課題はセンターに来ている女子中学生たちのことです。もう4、5年来ている彼女たちは他の子どもたちと比べても特に厳しい家庭環境にあります。ある子は母子家庭ですが、精神障害を持つ母親が入院がちなせいで、家に一人でいることが多く、最近

友達と飲むことを覚えた様子です。別の子は両親ともにアルコール依存で、母親は1年以上前に行方不明になり祖母宅に引き取られています。恐らく下着の替えもないであろうほどの経済状態で暮らしています。さらにもう一人は父子家庭ですが、父親がアルコールがらみの喧嘩で意識不明の重体になる怪我をしました。身を寄せた知人宅で年少の子の面倒を見ながら暮らしていますが、学校に行っていません。家庭状況を考えると、彼女たちがこのようになる可能性があることは何年も前から認識していました。この国では10代の妊娠出産、飛び降り自殺など深刻な事態になることも珍しくないですから、そういった可能性が頭をよぎらなくもありません。高度経済成長期の豊かな社会に生まれ育った私としては、どれだけやってもこの地域の暮らしを理解し子どもたちの心情を共感をもって受け止めるのは無理だと思わずにはおれません。

ただ、私には共感できないとの大前提を踏まえた上で、それでも私はここにいます。二つのものを一つにし、隔ての壁を打ち壊す(エペソ2章14節)のが主のお働きです。私には出来ないからこそ、出来ない者を通して主は働かれるのではないのでしょうか。

最近同労の姉妹たちと話していることは、あの子たちにどうやって福音を伝えようか、ということです。



「オルガン演奏を通して主を賛美できる恵みと喜び」

矢吹 綾子
Ayako Yabuki
聖書神学舎 教師

聖書には、神を賛美するために楽器が用いられたことが記されています。たいへん興味深いことですが、創世記4章21節では「その弟の名はユバルであった。彼は竖琴と笛を奏でるすべての者の先祖となった」と、楽器が人類の歴史とともに存在していたことが記されています。また、歴代誌第一16章4～42節では「ヘマンとエドトンの手には、ラッパとシンバル、また神の歌に用いる楽器があつて、音楽を奏でた」と、ダビデがレビ人の中からある人たちを指名し、楽器を演奏させ、賛美を捧げさせたことが記されています。

さて、現代において、神を賛美するための楽器の中に、オルガンがあります。オルガンがキリスト教会の礼拝で用いられるようになったのは13世紀頃で、声楽の補助や合唱の代用として使われていました。オルガンの独奏曲が作曲されるようになったのは、15世紀のルネッサンス時代になります。そして、オルガン音楽が最も発展したのは、17世紀から18世紀半ばのバロック時代です。特にこの時代のドイツは、多くのオルガニストによりたくさんの作品が作られた時代で、オルガン音楽の全盛期と言われています。このようなドイツにおけるオルガン音楽の発展は、ルターの宗教改革により礼拝改革が行われ、会衆が歌う賛美歌(コラール)が作られたことが大きな要因となっていたと考えられています。

ルターは、「ドイツミサと礼拝の順序」の序言で、福音を宣べ伝えるために「人は聖書を読誦し、歌い、説教し、執筆し、詩作しなければならぬし、そのために助けとなり、利益となるならば、私はそのうえにすべての鐘を鳴らし、すべてのオルガンを奏し、鳴ることのできるすべてのものを鳴らしたいものである」(ルター著作集より)と記しています。音楽に造詣が深く、自らもリュートを演奏したルターは、礼拝の中で、賛美のために楽器を積極的に使用しました。

コラールは、神への感謝や祈りとともに、みことばを伝え、教えるために作られました。コラールには多くの節があるものが多く、情性で歌うことのないように、合唱と会衆とオルガンが交代で歌う方法(交互演奏法)で歌われるようになりました。そのため、オルガニストはコラールの歌詞や歌詞の基になるみことばを調べ、いろいろな音型(音楽言語)を用いて、歌詞の内容を音で表現したオルガン・コラールを作曲するようになったのです。また、自由形式の作品においても、オルガン・コラールと同様に、音楽言語を用いて作曲をしました。

このようにして作られた作品を演奏し、神の御業を音で語り、賛美できることは、オルガニストにとって大きな恵みであり、喜びです。

48年を振り返って

Looking Back at my 48 Years of Teaching

1974年、30歳で神学教育に携わることになって半世紀近くになりますが、この3月をもって退くことになりました。ここまで多くの人たちの祈りに支えられてきたことを心より感謝いたします。何事にも「とき」があると伝道者は言います。確かに、次の世代にバトンを渡す「とき」が来たのです。しかし、これで「戦い」を終えてよいということではないでしょう。御国に移されるまでは、方法を変え、ペースダウンして戦いは続くのでしょうか。

私にとって、教えることは喜びでした。教えられる側でいつもそう思っていたかは別ですが。聖書は古代オリエントのコンテクストで読んでこそ「面白いのだよ!」と、「ツムラン教団」に皆さんを引き込んで楽しんでいました。オリエントとの類似点だけでなく、相違点(コントラスト)こそ重要なのですよ、と。これからしばらくは聖書学研究所の所長として、新しい戦略で、新しい世代に貢献できるようにと夢を見ています。

神学校教育は、伝道者の「たまご」が、この「世」の執拗な攻撃に対して、聖書こそ教会を守り、教会がそこに土台を据えるべき「唯一のもの」であることを確信するためのお手伝いをするのだと思います。必要な道具とその使い方、そして料理で言えば、美味しい料理を食べさせてあげることでしょう。果たして私は、そのようなものを提供してきたでしょうか。



(古代シリアの都市 ウガリト)



(パウロの回心地、ダマスコ途上で 2006.3.21)



津村 俊夫

Toshio Tsumura
聖書神学舎特任講師
聖書学研究所所長

50年近くの歩みで、こんなことでは研究などできない、なんでこんなことまで、ということもありました。本気で日本脱出を考えたこともありましたが、でも、私をここまで留まらせたのは、主に献身した研修生たちのみことばに向く真摯な姿でした。単に学者を育てるためならば、大学院博士課程の助教授として留まっていた方が良かったでしょう。今頃は、各地の大学で弟子たちが教授として孫弟子を育てていることでしょう。しかし、聖書を「聖書」として教えることの喜びは神学校でしか味わえません。

不思議なことが起こりました。新改訳聖書の著作権に関わる熾烈な戦いのただ中、毎日、会議とメールと電話と面談で明け暮れ、研究時間がまったくなかったそのような時(2003)、数日でまとめた小論文(ハバクク3:4)が、国際旧約学会(VT)の編集者の目に留まり50年記念誌に選ばれました。2010年には聖書学会(SBL)の編集委員に招かれ、「新改訳2017」の責任をとる中、二期務めました。現在は、VT編集顧問に選ばれ、今年からTyndale Bulletinの顧問を依頼されています。私にはあり得ないと確信していましたが、拙著『ヘブル詩の文法』が一般の出版社(ひつじ書房)から近く出版されます。

振り返る今、50年前と同じことを考えます。外国で出来上がった神学に基づいて聖書を学ぶだけなら、長い間の牧会伝道に耐え得ないでしょう。明治以来の「和魂洋才」の教育の影響で、我が国の聖書学も「聖書について」の学び(聖書学)でしかなく、「聖書」そのものの学び(聖書学)とはなっていないのではないかと思います。聖書宣教会がこれからも聖書そのものの学びを大切にした神学教育を続けていくことを願い、そのために祈ります。

2022年度 講座案内

2022 Courses and Schedule

2022年度は次のようなプログラム、講座を予定しています。各講座の詳細は、別紙案内やウェブサイトをご覧ください。このほかに聴講制度があります(詳細は事務局まで)。

拡大教育・継続教育

2022年度から、従来の拡大教育に加えて、卒業生向けの継続教育をオンラインで始めます。また、拡大教育の内容も見直し、聖書塾、公開講座、教会合唱講座の3つと致しました。いずれも詳細は、時期が近づきましたらウェブサイトでご案内します。

第46回 夏期研修講座

詳しくはウェブサイトをご覧ください。

「ローマ書に聴く」

期間：7月4日(月)～6日(水)

会場：奥多摩福音の家

対象：牧会者、牧会者の配偶者

主講師：鞭木 由行

(聖書宣教会 聖書神学舎教師)

第38回 教会音楽夏期講習会

詳しくはウェブサイトをご覧ください。

「みことばと音楽」

朗読とコーラルによるヨハネ受難曲

期間：7月27日(水)～29日(金)

会場：聖書宣教会

対象：聖歌隊員、聖歌隊指導者、奏楽者、独唱者等、礼拝や教会の諸集会で音楽の奉仕に携わっている方、および奉仕の準備をしたい方。教職者・信徒の方も参加できます。

講師：聖書宣教会教師・講師ほか

2022年度 主要年間予定

2022 School Year

2022

4月5日(火)	入会式	10月27日(木)	後期授業開始
4月8日(金)	前期授業開始	11月5日(土)	オープンデー
5月19日(木)	祈りの日	11月18日(金)	祈りの日
6月7日(火)～6月8日(水)	特別講義	11月26日(土)	賛美礼拝
6月25日(土)～7月1日(金)	集中講義	12月16日(金)～1月4日(水)	クリスマス調整期間
7月2日(土)～8月30日(火)	夏期調整期間		
7月4日(月)～7月6日(水)	夏期研修講座		
7月中旬～	キャラバン伝道	2023	
7月27日(水)～7月29日(金)	教会音楽夏期講習会	1月5日(火)	後期授業再開
9月2日(金)	前期授業再開	2月6日(月)	入会試験
10月14日(金)	前期授業終了	2月11日(土)	信教の自由を守る日
10月15日(土)～10月26日(水)	秋期調整期間	3月9日(木)	卒論発表会
10月18日(火)～10月19日(水)	リトリート	3月11日(土)	後期授業終了
		3月13日(月)	第64回卒業式